

中島さんへのインタビュー

理学部附属植物園の職員の中島和秀さんにお話を伺いました。中島さんは、理学部植物園の管理の仕事をされて今年で七年目になります。また、中島さんは、以前から芦生通信の読者でもあります。

——植物園の管理とは、具体的にどのような仕事をされているのですか。

私ともう一人の職員で仕事をしています。私は植物園のフィールド部分の管理を、もう一人の人は温室と圃場の管理や鉢ものの植え替えなどを主に担当しています。

フィールドの仕事で日常的にすることは、通路の枯れ枝や枯れ葉の掃除です。それから、池に引いている水は疎水の水なのですが、取水口や水路の掃除、バルブの調節をして池の水位を一定に保つのも、大事な仕事の一つです。疎水の水が池に流れ込むところにあるマスには泥や砂、枯れ葉などがたまるので、定期的に取り除きます。ま

た、今の季節は、竹の見本園から若い竹が伸びてくるので、それを毎朝刈り込みます。竹は刈っておかないと、すぐにはびこっていきます。

その他、園内の林床に散らばる枯木や枯れ枝は、一定の場所に集めておいて、月に二回ほど燃やしています。他に、疎水から水を引いている土管の掃除や、通路や林床、湿地の草刈、池のアシの刈り込み、アシの新芽の間引き、チャドクガの防除、樹木の剪定などは年に一、二回行います。台風や立ち枯れなどで樹木が倒れた場合、玉切りにして、園内の隅のほうに積んでおきます。時間が経つとそこにキノコや昆虫が発生するので、それらもまた、研究・観察の対象になります。これらの仕事は二人で行います。

秋は大変な量の落ち葉がでます。林床の落ち葉はそのままにしておきますが、通路は人が歩くときに滑って危険なので、きれいに掃いて、集めた落ち葉は堆肥にして鉢物の植え替えの時に使います。

——一番大変な仕事は何ですか。

年一回、春先に、池のアシを刈るのが一番きつい仕事です。植物園の池は、水深は六十センチくらいですが、何十年もの間に落ち葉がかなり厚く積もって泥沼状態になっているので、腿まである長靴を履いて池に入らなければなりません。膝上まで泥に埋まるので、うまくバランスをとって歩かなければいけません。そのようにして、アシや河骨（コウホネ）を刈ります。大変な仕事ですが、全部刈り終わって、それまでぼうぼうに生えていた枯れア



シがきれいに刈り取られたのを見ると
気持ちがよく、また、これから春がく
るんだなあと思います。刈り取ったア
シは、燃やして、灰は植物にまいて肥
料にします。

——どんなときに仕事のやりがいを感じますか。

とにかく私は、この植物園が好きなので、たくさん植物があつて、たくさん生き物が棲んでいるこの植物園で働けることが幸せだと思つていんです。

——理学部附属植物園は、生態植物園としての目的を持って作られ、また、ここがこの植物園の持ち味だと思つていますが、それを維持するためには作業の面でどのようなことに気を付けておられますか。

前任の技官さんからの引継ぎで、なるべく自然の状態を保つように、樹木はできる限り伐らない、草刈りは最小限に留める、農薬は極力使わない、落ち葉も、生き物のすみかになるので、通路以外はなるべく掃かないなどを言

われています。また、植物園を使つて
いる研究者に話を聞いて、自分だけの
判断で勝手に作業しないようにしてい
ます。

——温室と圃場には、どんな植物があるのですか。

温室には、カンアオイや、シダ類の
貴重なコレクションがあります。絶滅
危惧種などの貴重なものにはピンクの
ラベルが挿してあります。

圃場では、植物学教室の人が研究用
にコムギとカボチャを栽培していま
す。カボチャは、未熟な種子を実験材
料にするそうです。

——中島さんは、植物園の木で何が一番好きですか。

どれが好きで、どれが嫌いというの
はなくて、森として好きなんです。大
きな木や色々な植物があつて、そこで
生活する動物達がいる、植物園の森全
体が好きです。

——植物園にはどんな動物がいるので

すか。

野鳥や、たくさん昆虫、小動物な
どがいます。池には、カワセミ、コサ
ギ、ダイサギ、ゴイサギ、カルガモ、
マガモなどの鳥が来ます。カルガモは
巢もあつて、卵からヒナがかえつたこ
ともありました。疎水の水を引いてい
るので、小川にはホタルが餌にするカ
ワニナもいます。

——最後に、中島さんは、今後この植物園がどんな形になることを望んでおられるのですか。

一部の人だけで植物園のあり方を決
めてしまうのではなく、ここで研究し
ている人、ここが好きの人、近所の方
も含めて、様々な人で話し合いながら
決めていけるようになることを望んで
います。

——ありがとうございました。

今回お話を伺ったなかで、中島さん
が繰り返しおっしゃっていたのは、
「木の伐採があつた昨年末頃は、目
前で大木が切られるのを見ながら、相

談できる人も少なく、精神的にも辛いものがありました。でも、今はたくさんの人が植物園のことを気にかけてくれて、とてもありがたいと思つています。」ということでした。

中島さんは植物園に来た人の質問などにいつも大変親切に答えてくださいます。また、自分が研究対象にしたい植物や昆虫が植物園にいるかどうかという研究者の問い合わせに対しても相談にのつて下さり、とても感謝されているそうです。

たくさんの人が植物園のことを考えるために集まったのには、中島さんのこうした日ごろからの人徳によるところも大きいのではないかと思います。

この記事を書くにあたっては中島和秀さんには多大なご協力をいただきました。どうもありがとうございます。

最後に、中島さんは俳句もなさるそうなので、引用させていただき、この稿を終わりたいと思います。

空木咲き

野の鍵盤と

駆け下る

(うつぎさき ののけんばんと かけくだる)

森林に

棲む魚の背の

朧かな

(しんりんに すむうとのせの まんどかな)

和秀九十九句「夢夢(houhou)」

中島和秀著(書肆蜃気楼)より